

『グローバル世紀への挑戦—文明再生の智慧』 文理閣

終章 人類が文明の欲望から解放される日

—内からの人類再生を求めて

片岡 幸彦

自然はわれわれの知性にとっては
限りなく驚嘆すべきことを
最高度の容易さと単純さで行っているのです。

ガリレオ・ガリレイ (『天文対話』)

一 グローバリゼーション問題のルーツを考える

一) 高度に発達した知的産業の登場

一九七三年秋筆者は、セネガルの映画監督兼作家のセンベヌ・ウスマンに遭うために、西アフリカを訪問した。当時の日本ではアフリカは黒人首狩り族が住む危険な場所というのが一般の常識だった。恐る恐る近づいた黒人アフリカ、そこに存在した日本人は在外公館の外交官氏一人だけだった。現地では町の人たち、作家・文化人、新聞・放送、それに政府要人などから、まさに公私共に歓迎された。そのときにセンベヌ・ウスマンが最初に語った言葉が深く胸に刺さった。

「貴方が私の映画作りを応援してくれるのは有り難い。しかし先進国からの援助は止めて欲しい。援助してくれる度に、その何倍もアフリカの伝統文化や自然の富が奪われて行きます。過去にも私たちは、奴隷貿易三〇〇年、イスラーム支配数百年、欧米植民地支配100年を経験して来ました。ここらでいい加減私たちのことは私たち自身に任せてくれませんか」

先進国の援助は、戦後のアメリカの食糧援助や、一九八四年の日本の飢餓救援キャンペーンなどの例を引くまでもない。その狙いが先進国による、途上国の市場開発と膨大な利益収奪にあることは、偽らぬ歴史的事実である。それにしても、アフリカの大地から生まれ、進化したと言われる私たちが、その恵みの源である自然への畏怖や、敬愛よりも、自然を自由に改変し、その資源を浪費し、あるいは破壊さえ許されると考え、さらに自己矛盾とも言える無限の開発に血道をあげることになったのはいったい何故であろう。

二十世紀半ば、退廃したアメリカ南部の町を走っていた「欲望という名の電車」(テネシー・ウィリアムズの戯曲、一九四七年)は、今や文化文明花咲ける大都市ニューヨークやロンドンやパリは言うに及ばず、近頃急速に発展したG20の都市のみならず、地球上隈なく、それも「動物的欲望」ではなく、「高度に発達した知的欲望」を乗せて、狂気のようなスピードで、昼夜の別なく疾走している。この電車は無軌道で、制御装置がなく、しかも当代流行の無人列車である。走り出したら止まらない。まさにこれが、様々な災いを今日の地球社会にもたらしているグローバリゼーション現象である。

二) 実体経済から遊離した「マネー」のグローバル化

いったいいつ頃からこのような事態が起こり始めたのであろう。近代化の歴史の紆余曲折は措くとして、直近では一九七〇年代に始まり、一九八〇年代初頭、アメリカではレーガン大統領が、イギリスではサッチャー首相が推進した新自由主義経済政策以後だと言われている。いわゆる「カジノ資本主義」の始まり、そしてそのグローバル化である。「金融工学」という学問(?)が登場するのもそれ以後であろう。例えば問題企業を安く買って、リストラして、高く売って暴利を企む投資ファンド。あるいは証券化された住宅ローンや「死の勘定書」と呼ばれる生命保険なども含まれる、複雑で奇怪な「金融商品」。自分が託した資金がどのように生産に寄与しているか知る由もなく、結果多くは激減した資産故に、生活資金の半ばを失い、個人は路頭に迷い、中小企業は倒産する。大企業もリストラの上、企業形体そのものは国家予算(国民の税金)によって救済される。こうした現代のマネー・ゲーム経済の実体は、誰にも詳らかにされないまま、根本的解決は先送りされ、国民の資産の多くが、地上に舞う紙切となって、彷徨い続ける。これが、今日欧米経済が主導するグローバリゼーションという怪物の正体なのではないか。そのような経済文化が支配する世界では、例えば問題となっている地球環境問題も、排出権取引を組み込んだビジネスによって、その改善策を検討するという経済的理屈も、また当然の成り行きと言えよう。レスター・ブラウンの政策提言にさえ警戒の眼差しが向けられる。しかし、問題は一九七〇年代、八〇年代に初めて起こったことなのか。そのルーツは、もっと遡ってつきとめなければならないのではないか。それが、この終章で、欧米近代文明の歩みと意義を再検討し、人類の内からの再生の可能性を追求したい理由である。

二、近代市民社会の自由・平等・友愛

人類の文明史を遡れば切りがない。概括的に言えば、古代は自然と一体の多神教の時代、中世以後・近代以前は西欧やアジア・アフリカの大部分で、一神教に基づく文化文明の時代である。それ

らは本書の第二部などにおいて議論があったので、本章では、一七世紀に始まり、二十世紀にいたる近代ヨーロッパ社会と、そこで生まれた文化文明的世界観・価値観の問題について考えたい。

近代ヨーロッパ文明社会の成立は、一般的には、封建的「身分制」からの解放、キリスト教会の「神」からの解放、「土地」と商業「資本」の産業への解放から始まったとされている。そしてこれらの政治的経済的要因が、相互に絡み合い、補完し合いながら、近代社会システムとそのイデオロギーを作り上げたと理解すべきではないのか。

一) 自由・平等・友愛

「市民革命」を成功させた近代市民社会は、それに相応しい、新しい国民国家の理念を掲げる。よく知られるのは、一七八九年八月二六日に憲法制定会議において採択された「フランス人権宣言」である。その第一条に「すべての人間は生まれながらにして自由であり、かつ権利において平等である」という有名な文言が記されている。それに加えて一七九〇年以降「友愛」への言及がしばしば試みられ、その後の政変に左右されつつも、一八四八年の二月革命によって「自由・平等・友愛」がフランス共和国の正式の標語となる。

近代市民社会にとって、まずは古い階級制からの「人権」の解放こそ、新しい社会の成立と発展に不可欠な条件であった。その社会的具体化がこの三つの理念によって表現されたと言えよう。事実、市民革命から二〇〇年以上経た今日でも、フランスの公共的建物の正面や側面に、例外なくこの美しい文字が鮮明に刻まれているばかりでなく、国連の「人権宣言」の第一条にも採用された。それでは、近代国家が掲げたこの「自由・平等・友愛」の理念が、その後の社会の変化や発展を通して、どのように実現されたのか。例えば普通選挙による議会制民主主義の導入、また社会主義革命を経て導入された人民民主主義体制などによって、それは具体的にどのような形で、どの程度に、目標を達成出来たのか。今日あらためて振り返ってみて、高らかに掲げられたこの理念が、遍く普及し、かつその目的が達成されたとは到底言えないのではないか。ではそれは何故なのか。

二) 理念成立の背景と「自由・平等」の理念が抱える問題

考えられる理由の第一は、この理想的とも言えるスローガンが、「市民革命」によって権力を獲得した人たちの視点から、彼らの利害得失の立場から掲げられたものだからではないであろうか。事実それらは、あらたに権力を得た階層において最大限実現が目指されるものだったと言えよう。反面、あらたに生まれた下層階層や、他の国・地域の圧倒的多数の諸国民は、その埒外におかれ、むしろその代償を支払わされる側に立たされた。次に、これらの理念そのものに、問題の本質が含ま

れていたのではないか。例えば市民社会の矛盾を解決するために建設されたとされる社会主義社会の経験を見ると、最低限の雇用・所得・福祉など、市民間の生活上の権利の「平等」を標榜する一方で、言論・集会・信条の「自由」が、資本主義社会以上に制限されて来たことは事実である。このような「自由を伴わない平等」は、スターリンの独裁体制や、ヒットラーのナチス（ドイツ国家社会主義労働者党）の悲劇や、日本軍国主義体制の苦い経験などによって、それぞれ別の形ではあるが、多くの苦い教訓を残す結果となった。つまり「基本的人権」の行使である「自由」を伴わない「平等」は、多様な偽装的「共同体」を生む危険を持ち、逆に「平等」を保証しない名ばかりの「自由」は、今日にいたるまで激しい経済的格差（人工的貧困・飢餓）を作り出して来た。このことは、今日地球上の隅々で如実に経験させられ、見せられているところである。

三) 「友愛」は西欧社会内の同胞観

三つ目の理念「友愛」についてはどうか。この方も、植民地主義時代の西洋近代のみならず、経済力・軍事力を背景に先進大国が主導する現代世界においても、地球市民の「友愛」が普遍的に成立する見通しを持っていたわけではない。今日、国や地域間の利害対立や民族・文明間の対立がむしろ顕在化している現実を見ても、「友愛」の理念はフランスやヨーロッパ先進諸国の「同胞愛」のレベルでしかなかったことが理解出来よう。つまり、これら三つの理念自体が、それぞれ別々のものとして成り立っているのではなく、一体として含意されて始めて、市民社会のあるべき理念として成立しようとするべきではないであろうか。別の言い方をすれば、「自由」「平等」「友愛」は、すべての人間の自然的生存権とも言うべき基本的人権の国・地域・民族を超えたものとならなければ、理念としても現実としても、普遍性を持ちえない。とは言え、現代社会が、近代市民革命が掲げたこれら理念と異なる、私たちの未来を見据えた、新しい理念を立ち上げるには至っていない以上、良くも悪くも近代市民社会が掲げたこれらの理念の地球社会における実現に工夫と努力を重ねることもまた私たちの責任であろう。

以上が、「近代社会」が到達した理念が、現代社会を生きる私たちに、いくらかの希望と共に、大きな負荷として残した問題であると考えられる理由である。

三 近代市民社会の「神」からの自立と「人間中心主義」

一) 「吾思う 故に吾在り」

次に近代的世界観と価値観の問題である。上述したように、一七世紀のヨーロッパは、フランス

で特にルイ十四世が軍事・外交政策を積極的に展開し、ブルボン王朝権力を拡張安定させた。また経済では重商主義経済を成功させた時代である。王朝文化も多面的な繁栄を飾り、近代思想上、特に画期的な理論が登場した。例えば、近代西洋哲学の始祖、ルネ・デカルト（一五九六年 - 一六五〇年）である。彼はスコラ哲学などの体制的学説からの脱却を試み、九年余の推考を重ねて、「吾思う故に、吾在り」（Je pense donc je suis）の結論を得た（『方法序説』、一六三七年）。もとより彼も全能の「神」の存在を前提としたが、世界を物質と精神に二分化し、特に「万民に公平に与えられた理性（bon sens、raison）」を、「自然の光（英知）」であり、人間存在のアイデンティティであると特化することによって、「考える自我」＝「理性」を「神」から贈られた天与の特性に他ならないと定義することに成功した。また同時代のイングランドには、帰納法の発明者フランシス・ベーコンが「知は力なり」（knowledge is power）を標榜し、『学問の力』（一六〇五年）を発表している。こうして一七世紀のヨーロッパの初期に、いわゆる近代ヨーロッパ社会思想の基礎となった「個人主義的合理主義」への思想的回路が開かれて行く。

二) 「社会進化論」の捏造

しかし、この時の人間の「理性」（bon sens、raison）や「知」（knowledge）は、まだ神の与え賜うた、つまり神に依存する属性に過ぎなかったと言えよう。その後「市民革命」が成就し、「産業革命」の成功と共に、王政から最終的に共和制に移行し、市民社会はキリスト教会の権威からも完全に解放された。そこで、デカルトの「理性」もキリストの「神」から自立していく道筋を辿る。つまりここから、人間の存在について、これまでとは異なる、世界における新たな位置を与える理論や思想が生まれる。その一つが一八五九年に出版されたダーウィンの『種の起源』である。ダーウィンの学説は、地球上の生物は、「神」の創造物などではなく、単純な生きものから複雑な生きものへと変化・発展し、人類も猿からさらに進化したとする理論と、一般に理解されている。「生物進化の多様性とその関係性」の上に展開された理論ではあるが、猿と人が「霊長類」（primate）と命名されたことが、意外なその後の展開を辿る。「産業革命」の成功と「科学技術」の発展が後押ししたとも思われるが、ダーウィンの学説は、例えば「系統」が「進化」に、「自然選択」が「人為淘汰」に、さらに社会学者（例えばハーバート・スペンサー）が、ダーウィンも述べていない「適者生存」の概念を前面に押し出したことから、他の生きものたちの相互依存・付与の法則である「弱肉強食」を人間社会そのものの中に導入するに至った。しかもそれを正当化することで、資本主義社会に都合のよいイデオロギーに利用されて行った。今や人間は「万物の霊長」として、科学技術を自由に操作し、人間社会の発展のためには、何事をも為し得る

存在となったと言える。ニーチェの「超人」の思想も、こうした時代社会の進展の中で生まれた。

三) 「神」の時代の終焉と「人間中心主義」社会の幕開け

こうして、上述のルネ・デカルトやフランシス・ベーコンからはじまり、ライプニッツ、スピノザ、カント、ヘーゲル等を経て成就する人間の「理性」や「知性」を梃子にして、私たちは合理的「個」として、「神」からも外界の「自然」からも独立して生きることが出来ることになった。もはや十七世紀までのヨーロッパ人のように、例えばパスカルが「無限の空間の永遠の沈黙」と表現したように、天を仰いで怖れ、慄き、地上にひれ伏して、許しと救いを乞うた「神」は、ニーチェの表現を借りるまでもなく、「死滅した」。十九世紀末には、教会関係者は最後の砦であった教育界からも完全に追放された。

例えばフランス共和国は世俗的近代社会となり、市民＝人間がその主人公となり、それと同時に「神」は教会の中に閉じ込められ、市民社会の精神的権威から、むしろ天を衝く壮大華麗な文化遺産へと、教会の役割が徐々に変わって行った。文学に登場する主人公や、芸術作品に描かれる人物や風景も、近代社会を生きる人間やその造形物にとって代わり、小説では主人公の成功物語や挫折物語などを通して、その内面の心理や生き様や運命が主題となった。

こうして神から名実ともに解放された近代人は、言わば「神」に成り代って、地上の支配者となることが出来たと言えよう。筆者が一九六六年フランス留学時に世話になった下宿先で、牧師から「日本の山水画は自然ばかりが大きく描かれていて、人間の姿が見えない。見える場合でも点のような存在だ。何故だ。絵の主人公たるべきは、自然を支配する人間でなければ可笑的ではないか」と迫られた。「神」を司る宗教者にしてこれだ。その時初めて西洋近代の意味が筆者を打った。事実自然科学の急速な進歩は、西洋社会の世界観の基となった「神」への信仰に代わって、科学技術の進歩への信奉にとって代わることになる。こうして私たち近代人は、自然を、宇宙を、自由に研究し、改変することに熱中するようになったのではないか。

四 野蛮と文明を乗り越えて

そもそも私たちが当たり前のように使う「文化文明」という言葉や概念は、何時、誰が、発明したものなのかという問題を、人間の文明史に立ち返って考えてみたい。

一) 「野蛮」という言葉の発明

私たちは、野獣というコンセプト＝言葉を動物に適応し、それとは本質的に異なる文化を持った生きものとしての人間を、ホモ・サピエンス（賢い生きもの）と定義して来た。しかし、その賢い人類が、なぜ野獣のものであるはずの「自然淘汰＝弱肉強食」の文化文明社会を形成することになったのであろうか。古代エジプト文明や、人類発祥の地と言われるアフリカ・エチオピアの奥地に今でも孤立して栄える、高度に知的な牧畜文明などの例を見るまでもなく、数千年昔の人類の文化文明に、弱肉強食を自らの共同体に持ち込んだ例は不明にして聞いたことがない。また地球上には、今でもグローバリゼーションの影響から孤絶した生き方を選択している地域が少なくない。いったい誰が、いつの時代から、私たちの文化文明社会に「支配と被支配」と「文明と野蛮」という分類を持ち込んだのであろうか。例えば、古代エジプトと地中海文明との交流の歴史を振り返ってみても、今日野蛮人と訳されている barbarian という言葉も、本来「異なる言葉話す人」という意味であって、せいぜい「異邦人」というほどのことであり、野獣に近い「野蛮人」とはおおよそ異なる内容の言葉であった。また古代に「奴隷」階級が導入されるのも、それよりずっと後のことで、良く知られる事例としては、欧米近代が「民主社会」のルーツのように唱道するギリシャで確認される事柄である。

二) 「野蛮」に対する「文明」の発明

現代文明を積極的に称揚した近代ヨーロッパが植民地政策のなかで、さらにその後も援助という名で、「野蛮」から「文明」へを口実に、途上国の自然を支配し、開発し、破壊してきたことも指摘しておかなければならない。その際、体制宗教としてキリスト教会が果たした役割も無視できないが、例えば、南米のアマゾン流域の開発に随行した聖職者が、「未開」のその地にこそ、イエスが説いた理想郷があることを発見したという興味深いエピソードがある。また元フランスの植民地だった西アフリカ出身の作家の作品の中に、選ばれた青年としてフランスに留学する息子を見送る母親が、「なぜあの子は、野蛮人の白人が住む外国などに行くのだろうか」と按ずる場面がある。この話は、「野蛮」という言葉が、ヨーロッパからアフリカに逆輸入された例であるが、「野蛮」と「文明」が何によって区別され、定義されるのかを考えさせてくれる格好の事例と言える。

日本の明治維新は違うのだと言い切れる評者はいったい何人いるであろうか。日本の明治維新においても、「文明開化」の神話がそれまで多様であった日本社会の伝統的世界観にとって代わり、それと共に、未開社会＝野蛮、文明開化＝進歩という新しい価値観が日本近代化を強引にまで推し進めた結果がどういうものであったかは言うまでもないと思う。そして日本だけでなく、このような

近代西洋の世界観は、一方では差別化のイデオロギーとして、西洋近代を超えて、さらに過去の人類の歴史にまで遡って適用された。〇七年十一月に刊行された『ブラック・アテナ』（マーチン・バナール著、新評論）がその捏造の歴史を明らかにしてくれている。そもそも今日当たり前のように使われている「文化文明」という言葉自身、西洋近代が発明した概念であり、それが人類に幸福をもたらしてくれるかのような幻想を広めたのも西洋近代と、それに与した私たち自身と言わなくてはならない。事実ルールなき市場主義経済は「先進国」と「途上国」、「強者」と「弱者」などの差別化を拡大してきたのに、それを社会発展の普遍的原理のように主張する言説が許容されている。「文明の対話」の推進や「混成文明に未来有り」との提言を活かすためにも、現代社会を規定しているこの基本的問題の十分な検証が行われなければならないのではないかと。

三) 「文明」への厚い信仰

私たちの社会は、特にこの二〇〇年の間に科学技術によって発明された文明の利器で溢れている。「産業革命」も終わることを知らない。化学は石油を原料とする合成物を大量に生産し、物理学は原子核の世界にまで手を入れて、核エネルギーを開発した。生物学は、遺伝子にまで手を染め、万能細胞が話題になったが、近代医学は人間を恰も機械の部品のように数値化し、病を合成薬剤投与で解決しようとする。しかし最近までに三五人のノーベル賞学者を含む学者たちが一〇〇年数十兆円かけて究明出来たことは、ガンは正常の幹細胞と極似したガン幹細胞で守られており、「生命の本質そのもの」ということだ。今や食品の添加物はおろか、イクラやミートボールを始め少なくない食品そのものが化学合成物で作られ、それを許している社会だ。また使用不能となった原子力発電所廃棄の問題を筆頭に、人間がまき散らしたゴミの山が、地球環境を破壊し、生物多様性が破壊され、人間の生命や環境そのものが脅かされ始めている。ガリレイではないが、人間が発明した科学技術は自然の力に到底太刀打ちできないことを知るべきだろう。

「日蝕」という現象を神の戒めや、神による希望と信じるアジアの人々が野蛮にして未開な貧しい人々で、先進国の都会でテレビに向かって月への到達や宇宙の探検に拍手を送る私たちの方が賢く豊かだと果たして言えるのか。素朴なアジアの人たちの方がはるかに明るく大らかに幸せに見えるのは、なぜだろう。「奢れるもの久しからず」とは、日本の伝統的世界観を伝える象徴的言葉ではなく、人間の未来に関わる、「文明進化論」や「人間発展主義」に対する教訓と言えないか。「ソロモンの栄華より、一つの野の花を」はイエスのことばであるが、日本にも「蓮華（草）の花は、野にて咲かせよ」という美しい言葉がある。自然の力を恐れ敬い、またその恵みや豊かさに謙虚に感謝する気持ちを、私たちはいったい何時から忘れてしまったのか。親から引き継いだ己の命の大事

さと、子子孫孫へと自然の恵みを引き継ぐことの重要性を、何時忘れてしまったのか。類人猿から
脳が三倍になったことが災いの源なのか。それとも、文明の歴史の中でも、特に「野蛮」や「未
開」という言葉を捏造し、それに対置して「自然」や「宇宙」や「神」に代わる文明世界を發明し、
それを世界に広めた近代文明なのか。しかし仮にそうだとすると、そのグローバル化を受け入れ、
日々石油製品や電化製品に囲まれ、便利なインターネットの世界に安住して恥じない私たち現代人
が、実は最も罰あたりな「悪」のルーツなのかもしれない。「もう遅い (too late)」とも言われる。
しかし簡単に諦めるわけにもいかない。

五 ○・一%の億万長者と一〇億の飢餓

最近グローバル経済の危機をめぐる議論が内外で目立つ。アメリカや日本など先進国の専門家の
間では、ロシア復権の動き、中国・インドなどアジアや中東の台頭が異口同音に指摘される。しか
しグローバル経済の現状分析もままならず、先行きも定まらないまま、例えば「過度の悲観をでは
なく、希望を！」とか、「まずはここで深呼吸して、頭をやわらかくして戦略を練ることが必要だ」と
発言するに止まっている。その一方で、これまで世界の政治経済を主導してきたと自負する欧米先
進国政府も、俄かにG20へと議論の場を広げてみせたものの、具体的ヴィジョンを何一つ打ち出
せないのているが現実である。

今世界を席卷しているグローバリゼーションとは一体いかなる怪物であろうか。人、財、マネー
(資本)、技術、情報がグローバルに移動し、浸透することによって、世界経済は活性化すると論壇
は挙って主張して来たが、大方の予測に反し、それらが自由にグローバルに動いたことで、むしろ
世界の国・地域の内外に利害・得失をめぐる急速な摩擦と衝突が起った。その結果、○・一%の億
万長者の一方に一〇億の飢餓という格差が生じ、他方でエネルギー・食糧・資源の争奪が起り、
今や経済社会のみならず、人々の生活基盤そのものが大きく揺れている。関西の財界文化人某氏は、
この状況を「多臓器不全」と切って捨てた。いったい誰が、何がそのような事態をもたらしたのか。

六 地球文明の行方を見定める

上述したように、そもそも「文明」と「野蛮」ということば自体が一つの文明が他の文明を支配
するために捏造した、人間の悪知恵以外の何物でもなかった。突き詰めて言えば、人間の文明の発
展なるものは、人間の欲望を、またその結果、弱肉強食を自らの種の内に拡大再生産する装置とし
て、特に西欧近代以降今日まで、首尾一貫して機能して来たときえ言えよう。自由とか、進歩とか、
福祉とかいうキャッチフレーズは、その目晦ましぐらいに考えておいた方が無難かもしれない。人

類は自画自賛する科学技術の急速な進歩と市場経済のグローバル化によって、皮肉なことに中世以前、否古代以前へ先祖返りする方向に舵を切り始めたと言うべきかも知れない。先進国であれ途上国であれ、また国際社会であれ、その指導者や官僚たちは、自分たちの足元に広がる治安の悪化や先進国同士の利害対立が、内乱や戦争を引き起こしかねないことの方に気を配ってはいるが、およそ10億の飢餓寸前にある地球の同胞のことなど考えていない。騙されてはならない。深呼吸をしてよく自分の周りを、そして世界の行方をしっかり見据える必要があるのではないか。

七 内からの再生の力を結集しよう

日本ではこの十一年の間に毎年三万人を超える自殺者を記録し続けている。中小企業の倒産や派遣切りもその背景の一つであろう。一方に限りなく付加価値を追い求めて、利益を追求する企業社会システムがあり、そこでは過労働やワーキングプアによる人間性喪失があり、他方では首切りが易々として行われる（昨年25万人）。最近、近代社会の病理をそこに生きる主人公と共に炙りだした、ドストエフスキーの小説が読み直され、日本近代社会の病根と闘う人たちの群像を描いた小林多喜二の小説もベストセラーとなった。これらの読者からも、現代社会への強い疑念（諦めに近い絶望）と変革への熱い叫びが聞こえて来る。今や文明化し、都市化したこの地球上の国や地域では、行方知らぬ徒花マネーが宙を舞う下で、人間らしく当たり前生きる社会環境が崩壊しつつある。

富や財や技術や労働をシェアし合う共同体社会は、どこへ消えたのか。日本では農業も漁業も林業も衰退に向かい、美しき山河は荒廃寸前である。年四万種単位で絶滅を続ける生物多様性の行方、二〇三〇年にも北極圏の氷河も氷も消滅し、一方では多数の湖沼の枯渇と砂漠化、他方ではデルタ地域を抱える国で、大規模な水没による人命と住居と農業の多大な損害が始まっている。確かに気候変動も生態系異変も、四六億年の地球史上幾度か経験した現象ではあるが、今日私たちが直面している事態は、産業革命以後二〇〇年を超えて、アイシュタインでさえ「今度は鉛管工として生まれ変わりたい」と漏らすほどに、益々欲望マシン化した現代文明の忌まわしき人為現象に他ならない。一〇〇年と言わずとも、五〇年先にも地球全域に何が起こるか予測さえできないこの現実こそが、かつての「ローマ帝国」や「オスマン帝国」などとは本質的に異なる「グローバル文明帝国」の特徴である。そのことを肝に銘じ、子子孫孫のために、人類再生の希望のシナリオを描かなければならない。それが私たちに残された最後の責任だからだ。

「アメリカ時代の終焉に対して、EUが再びイニシアティブを取る時代になりましたね？」とEUの識者に水を向けると、「いやEUにその力はない。これからは中国でしょう。インドにも期待し

ないと」と答えが返ってきた。先頃開かれた一連のG20でも大国側の積極的な姿勢は見られず、何等抜本的な政策は出さず終だ。私たちは国際社会と称するこうした現体制の動きにのみ目を囚われず、上からの、外からの圧力に抗し、一人ひとりが、自然から与えられ、先人から受け継いだ本来の生き方を回復することに心を砕くべきではないか。「万物の霊長」と言うのなら、霊長らしい品位を示し、霊長としての責任を果たすためにも、自分たち人間こそが、文明という毒素をまき散らして来た張本人であることを、先ずは自覚することではないか。そういう原点に立って見るなら、近代国家が示して来た政治の貧困、企業ビジネスが追求した貪欲な経済、都市化の集中で荒廃したコミュニティ、それらを姦しく賑わした徒花文化などは、遠からず見捨てられよう。そしてその先に、農林漁業・里山や職人芸の活気と、地産地消の町並みで賑わう庶民の日常が果たして待っていてくれるのか。^{ヒューマン・ネイチャー}本来の人間性が活かされる社会の再生のためには、一人ひとりのイニシアティブによる、この「内からの再生の力」を少数から多数へと広げることによって、現代文明が目指す方向を、グローバル資本主義とグローバル帝国主義の文化から、「生愛老病死」が生み出す付加価値も、その手段である「衣食労住」も、自然に限りなく返せる文化に変えることが求められていると思う。またそうすることで、次の世紀に向けた再生への道が開かれ、人類は未来に向けて、希望の道を歩むことが出来るのではないか。

本書では、三部二二章での議論を通して、人類の歴史が残した知恵、現状の問題の本質をめぐる学際的認識、またそれらを踏まえた、各論者なりの再生のシナリオを提示することによって、少なくとも前へ一歩進む一里塚の役割は果たせたかと考える。これが契機となり、内外の論壇において、議論が活発に広がることを強く期待したいと思う。